

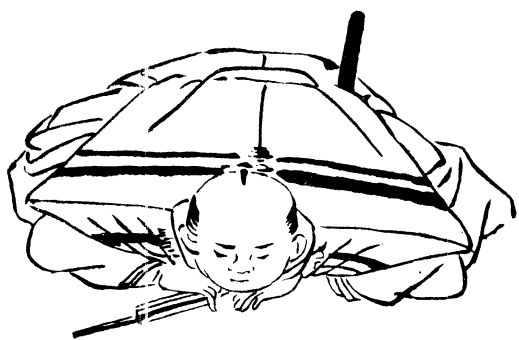
却^{かへ}て^まを^しり^しと
御^{おん}知^ち而^の已^まり

大^{だい}悲^ひ心^{しん}

千^{せん}禄^{ろく}本^{ぼん}



芝全交殿作



千手観音とも云ふべし佛も、不景氣には是非なし痛はしや千本の御手を、安く損料頼にせんと、御覧の面の皮、千兵衛といふ山師、大悲のお手を一本、一兩つに仕切り、金子千兩、手切金を出し、手前で損料貸をせんと切拂ふ。



「皮切三本塔」
「たらモウ痛くもない、悪い手があつても撒き直しはなし。」「せんじゆつめた事だ。」「こちらの方は大方手古摺りました。」「ばらきり金千兩箱。」「



「かまきり三本塔」
「たらモウ痛くもない、悪い手があつても撒き直しはなし。」「せんじゆつめた事だ。」「こちらの方は大方手古摺りました。」「ばらきり金千兩箱。」「

せんじゆつめた事だ。」「こちらの方は大方手古摺りました。」「ばらきり金千兩箱。」「

千手^{せんと}の御手^{ごて}を損料
 貸^かするとききよ
 り、先づ薩摩守忠
 度^{たけ}を先^まとして、夫
 木童子^{もこどうし}、人形芝居
 の捕手^{とりこ}、手^てのない
 女郎^{ぢやうらう}、てんぼう正
 宗^{せいしゆ}、無筆^{むびつ}、三味線
 の弾き習ひ、その
 他手^{たて}の入用^{いりよう}の者、
 貴賤^{けいでん}群衆^{ぐんしゆ}として借り
 に来^きる。

てなし貸^かの手代
 てれめんてい兵
 衛^{べい}、帳^{ちやう}を付ける。
 「樹掛筋^{じゆかけぢん}のある
 は、一よがた



高うござる。
 大悲の御手、澤庵漬の大根の御手の様なり。
 「モンお足のお餘りがあらば下さりませ。」
 「拙者事は御存じの通り、借人知らずと御訪し下され。」
 「痿びて落ちたは誰にやる、かにやる、いとしいもんに、やりまなしよ」との御誓願。



忠度の打落された
 は右の腕、忠度少
 し急き込み給ひ、
 餘りの嬉しさ、矢
 ツ張り左の手を借
 りて來給ひ、漣や
 の短冊も左文字に
 出來、これはどう
 だと右の手を借り
 にやり給へば、最
 早貸切りて無いと
 のこと、忠度今は
 かなはじと思し
 召し、左の御手に
 て無駄書をし給ひ
 にしにもかまはず
 これは仕舞つた、
 南無阿彌陀佛、
 と念佛を稱へ給ふ。



大悲千祿本

手の無い傾城共、
 千手の御手にて客
 をだましたれども
 掛料借の御手なれ
 ば、間に取りに来
 るには度々困る。
 禿と云ふ者は、
 お手が鳴るなら
 銚子と悟るもん
 だ、客人はお手
 が無いなら笑止
 と悟んなんし。
 「この子は客人
 の見ていきつ
 しやるに、氣
 のつかねえ、
 早く持つて行
 きやな。」
 「それでも取り
 に來んしたも
 のを。」
 「怖しく手のあ
 るいとたての
 たての様だ。



無筆な奴、千手の御手を借り、高慢に手紙證文などを書けども、佛の手なれば、梵字ばかり出来て居て一つも通用せず、高い奴の料簡は格別、只返すのも損なりと、爪に火を燈し、蠟燭の代りにする。これ手燭のはじまりなりと云ふも久しい奴さ。

「梵字と書状と取違へ、今にも用事と云ふならば、梵字で書状が書かれうか。へんちきく〜くよ。」
 「然いよう〜はてやかまし〜い蠟燭だ。」



大 悲 千 祿 本

其頃、勢州鈴鹿山に鬼神棲みて、國土の民を惱しければ、田村曆に宣旨ありて退治せよとの勅なれども、千手のお手が無くては、一度放せば千の矢先と云ふ狂言が出来ねば借りに來給ふ。

「貸出して手は一本もござらぬが、お貸し申さう。」
 「一本兩位でお貸しなさらぬか。」



観音千兵衛と通屈
し給ひ、貸出した
る御手を取集めて
田村磨に貸して又
儲ける。

「千兵衛手を改め
る。女郎に貸し
たは手指がなくな
り握りこぶし
で歸るは喧嘩の
手傷、鹽屋へ貸
屋へ貸したは青
くなり、下女に
貸したは糠味噌
臭し。飴屋のは
ねば、飯炊は凍
け搦屋に貸した
は肉刺だらけ。
人差指と中指
が。こいつは
すこ合點が
かぬわえ。」



本 祿 千 悲 大

